

近世庶民の異界観

異界双六を中心に

はじめに

人間は自分の世界の外にあるものを異界と考える傾向がある。その異界に対する認識が世界観の一部であることは言うまでもない。広い意味での「世界」は自分の住んでいる領域だけでなく、他者（異人）の住んでいる領域をも含むのである。自分でない者・他者（異人）の住んでいる領域こそが異界だと考えることは、いずれの時代においても人々の基本的な認識である。

異界や異界観に関しては主に、民俗学研究の中に論じられている。その場合、異界とは超人間的な存在・カミの住みかであり、あの世・他界とされることが多い。しかし、異界を異人の住みかと捉えるならば、その範囲も広がるわけである。異界を定義する時は、まず異人とは何かと問わなければならないのである。

筆者の考えでは、異人とは凡そ、①自分の村・町の住人でないものⅡ漂泊者、②庶民でないものⅢ支配者・権力

ポロヴニコヴァ・エレーナ

者、③人間でないものⅣ超人間的な存在Ⅴカミ、④日本人でないものⅥ異国人・外国人、という四つに大別できる。したがって、これら四つの存在の住んでいる世界は異界と見なされるのである。言い換えれば、自分の村・町でない所、支配者・権力者が住んでいる所、異国・外国、あの世・他界などは全て異界となる。

一見では、それぞれの異界は互いに何の関係をもたないようである。しかし、そうではない。それぞれの異界は、人々の認識の中では、一つの総合的な「異界」をなす。他所から来るもの（Ⅱ漂泊者・カミ・異国人や外国人など）は一般的に、単に来訪神・カミとして認識されている。支配者・権力者もカミと見なすことがある。時代と共に、このような考え方は変わっていくが、簡単に言ってみれば、「異界」とは広い意味での「カミ」の世界となる。それは基本的な認識と言って差し支えない。

本稿は、近世庶民の異界観を明らかにする目的とするものである。その際、国立国会図書館蔵の「十界双六」を資料として用いる。「絵双六」が出版物である以上、そこに表現される価値観には、時期や地域を含めて、時代時代の世相、人々の意識といったものが強く反映されている⁽²⁾ので、双六を史料として用いることができ、そこから当時の人々の世界観・思想を把握できるのである。

「十界双六」と同種なものは七点ほど現存しているが、いずれもともとと名称はなく、それぞれ「浄土双六」「仏法双六」「十界双六」などのように、所蔵機関で適当に名付けられたものである。岩城紀子氏はこの双六を「妖怪浄土双六」と呼称している⁽³⁾。しかし、本双六の内容を具体的に見ると、いずれの名称も不適切と言わざるを得ない。それ故、本稿では本双六を「異界双六」と名付けたい。そこには異界が描かれているからである。

この異界双六は年代不詳のものである。しかし、本双六の下半分に登場する妖怪の描かれ方は「化物づくし」(年代不詳)や「百怪図巻」(元文二(一七三七)年)などの絵巻に近似していることから、本双六の成立年代は江戸中期以降と推定できる⁽⁴⁾。

本双六は従来、ほとんど研究対象とされなかった。管見では、多くは資料紹介にとどまっており、本双六の考察を

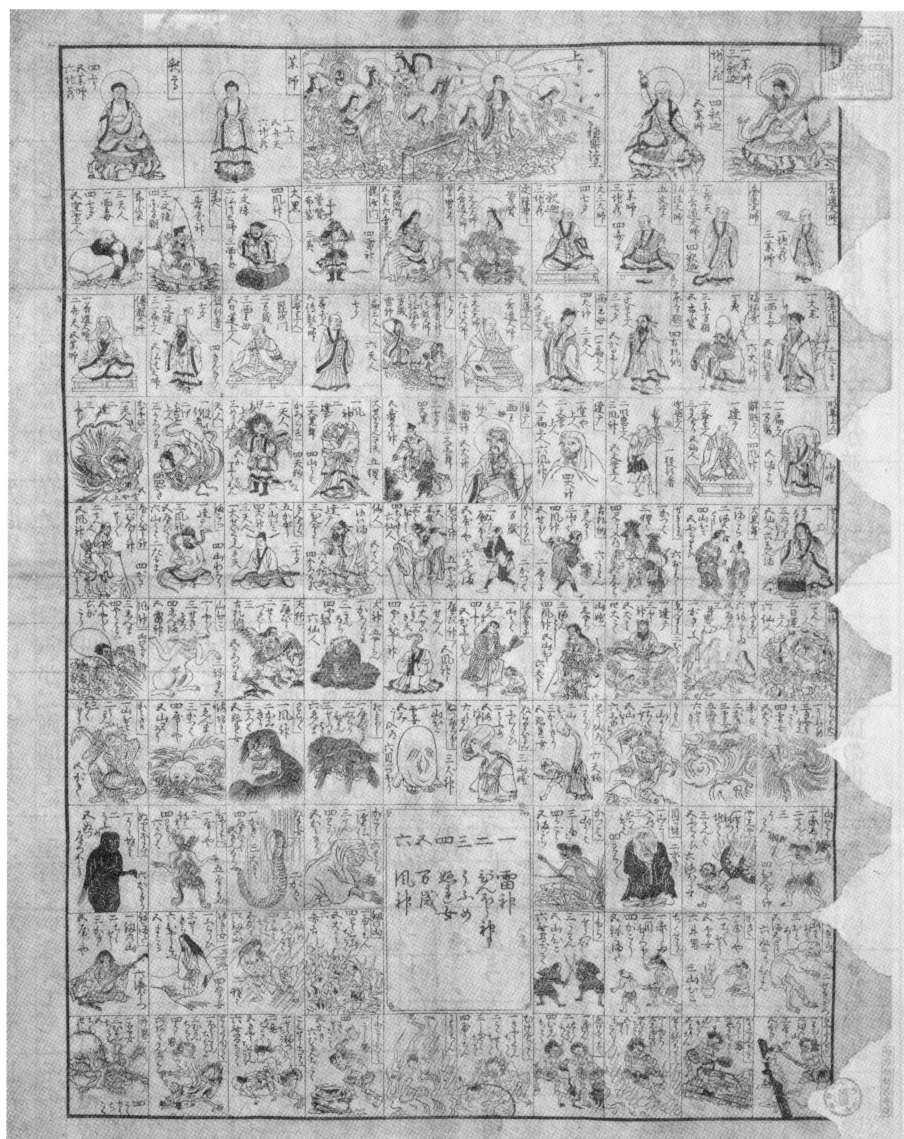
行った論考は一つしかない。それは岩城紀子氏の「妖怪浄土双六考」である。それ故、本双六に表現される思想の解明はまだ大きな課題として残されている。

そこで、本稿では岩城紀子氏の説を紹介した上で、まず異界双六の構成について考察し、次にそこに表現される異界に対する庶民の認識について論じる。結論を先に言えば、本双六に描かれているのは総合的な「異界」である。超人間的な存在であるカミしか描かれていないように見えるが、実際は庶民の認識ではその背後にその他の異人(支配者や権力者、異国人・外国人など)の姿も垣間見えるのである。それはどのような形で表現されているのか、を本双六の分析で明らかにしたい。

一、岩城紀子氏による異界双六の構成

異界双六(図一)は一体どのような構成をなしているのか。本節では、まず岩城紀子氏の説を紹介する。

本双六の上りは「極楽浄土」であり、一番下は地獄となっている。それは浄土双六の基本的な構成である。しかし、本双六には「世俗化の傾向」が見られるのである。それは上半分に並ぶ仏たちや神々の描かれ方から明らかである。それら全部は、「日常において実際に手を合わせて排む対象であった」ものである。



図一、異界双六（「十界双六」）、国立国会図書館蔵

岩城氏が注目しているのは極楽浄土・地獄と「人間界」との境界の捉え方の変化であり、特に地獄との境界に登場する妖怪である。このような妖怪は本双六の七段目から九段目にかけて配置されている。それらは人間以外の地上で生活するものであり、地下の地獄界と一線を画している。妖怪の世界は人間の世界と境界を持つものであり、その境界線は六段目にあたる。その段の両脇には風神・雷神が描かれており、それは「ここを境に世界が分かれたれていることを意味している」。その間は「死後の世界への入口を守る番人」である奪衣婆と閻魔王がおり、「ここを境に、人間の生の世界から死の世界へ向かう境界域に入ったことを」表している。そして、山姥から山彦までは、「人々が暮らす里から遠く離れた山深き場所に息づく異形のものたち」であり、「妖怪たちの住まう空間を、人間の日常生活空間から隔絶された場所」を表現する。

「人間の世界との境界域は、死後の世界へと至る道筋」である。その「死後の世界」は地獄であり、極楽浄土である。神仏の世界と人間の世界の境界は五段目にあり、そこには「神や仏に近い存在として描かれている」門付芸人らが置かれている。

岩城氏は「本来ならば、この五段目と六段目の境には、人々の日常的な現世での生活風景を描くマスが並べられて

いるべきであろう。この双六にはそうしたマスは存在しないが、画面上には現れていなくても、その背後にそうした世界がある」。「この双六は三つの世界で構成されている」と言いかえた方がよいだろう。」と述べており、本双六は「神仏の世界」「現世」「異形の住む世界」の三つの世界からなるという。

以上、岩城紀子氏による異界双六の構成である。しかし、筆者はそれに賛成できない部分もあるので、次節以下は筆者なりの異界双六の解明を試みる。

二、異界双六の構成

一見では、異界双六は仏教で説かれている十界を構成としているのである。^⑥しかし、そうではない。異界双六には「人間界」がどこにも見当たらないのである。仮に振り出しの部分人間界とすることもできるのであるが、本双六ではそれがはつきりされていない。^⑦そのため、本双六は人界を描かず、異界だけを描写しているものである。言い換えれば、ここには人間ではなく異人が登場するのである。そして、本双六は異人の住む世界・異界を表現するものである。

その異界とは神仏の聖なる世界であり、妖怪の世界であり、地獄の世界である。いずれも異人（言い換えれば異形

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
①	釈尊	薬師	極楽浄土 上り						地藏	弁才■(天)
②	布袋	夷	大黒	毘沙門	普賢菩薩	文殊菩薩	元三大師	弘法大師	国光大師	善道大師
③	傳教大師	役行者	文学上人	一扁上人	七夕	日蓮上人	西王母	東方朔	福祿寿	寿老神
④	かりやうびん	天人	からら王	大せいくわんき 天	萬歳	維摩	達磨	空也上人	解脱上人	明恵上人
⑤	やくひやう神	まこら	きんなら	仙人	ひんほう神	やくはらい	古札納	せきそろ	大黒舞	せうく
⑥	風神	山びこ	天狗	犬神	へび神	酒天童子	山姥	ゑんま王	せうつかばゝ	雷神
⑦	かみきり	海坊主	わうく	おとろし	ぬつへらほう	ぬらりひよん	みこし入道	うわん	赤舌	ふらり火
⑧	ぬりふとけ	ひやうすべ	ぬれ女	かごう			かつは	目一ツ坊	やしや	山わらう
⑨	ねこまた	ゆき女	うふめ	鍬の山			しゆら	ちくせう	かき	■(せ)うきら
⑩	牛鬼	とうかつ ちこく	こくせう ちこく	しゆこう ちこく	ようちん	むけん ちこく	悪けん ちこく	せうねつ ちこく	ほうくわん ちこく	きやうくわん ちこく

※■は資料破損のため欠落している字であり、括弧内は筆者による補足である。

図二、異界双六の構成

のもの)の住む世界である。その意味では、岩城氏の言う「神仏の世界」「現世」「異形の住む世界」のような分類は不適切である。神仏も妖怪もそれ以外のものも異形であり、本双六全体に表現される「異界」は「異形の住む世界」だからである。

具体的に本双六の構成を見てみよう(図二)。左上は仏界(A①・B①・C・H①)で、右下は地獄(B・J⑩)だというように、基本は仏教の垂直的な世界である。しかし、仏界と地獄との間は必ずしも仏教説に従ったものではない。ほとんどは、七福神、弘法大師や役行者などの多くの伝説に出てくる聖、妖怪などのように、庶民の馴染み深いものばかりが並んでいる。これら全部を仏教の十界に適合することができだろうが、庶民の間ではこれらが仏教説の何々界に属しているものではなく、単なる「異界」として認識されたと考えられる。

このような「異界」が統一されたものでないことは、本双六から明らかである。ここは二元的な構成がある。単純化して言えば、それは善(上半分)と悪(下半分)の二つの世界が並立している。その境界は大体、五・六段目あたりに置かれている。それ以上は聖なる世界であり、福・長寿・美を司つてこの世にもたらしめてくるものの住みかである。他方、五・六段以下は悪の世界で、老死・禍などをも

たらしめてくる世界である。

この二つの世界は相対的である。仏界―地獄という対だけでなく、それぞれの異形の者(異人)も対をなしている。例えば、釈迦如来(A①)・薬師如来(B①)・阿弥陀如来(極楽浄土)、C・H①)と閻魔王(H⑥)である。前者は仏界に住むものであり、後者は地獄を支配するものである。

あるいは、地藏(I①)と正塚婆(奪衣婆、I⑥)も相対的である。近世においては、御優婆勤進という宗教者がいた。その姿は元禄三(一六九〇)年刊の『人倫訓蒙図彙』第七巻に見出せる(図三)。また、その説明を見ると、次のようである。

御優婆勤進、伝聞彼三途川原にはすさまじき老女の有て迷土に趣男女の一衣をはぎとり給ふとかや、今生より此人に馬をつなげば餘所見をして通さるゝと、みてきたやうにまさしくといふほとに、女性の信仰するは聞えたる事也(国立国会図書館蔵、読点は筆者による)

御優婆勤進は天秤棒の両端に奪衣婆と地藏菩薩の厨子を担いて町を歩きまわり、奪衣婆信仰を広めていったのである。ここで留意したいのは、奪衣婆と地藏菩薩の厨子を担うことである。一方は、信仰の中心である奪衣婆であり、



図三、御優婆勸進『人倫訓蒙図彙』第七卷、元禄三〔一六九〇〕年刊、国立国会図書館蔵)

それは地獄そのものを象徴しているかのようである。他方は、地獄から救済する地藏菩薩であり、救済の象徴である。両方を担って歩く御優婆勸進は墮地獄だけではなく、地獄からの救済をも説いていたのではないかと考えられる。本双六における尊衣婆と地藏菩薩の相対的な位置は、御優婆勸進によって広まっていった信仰がかなり流布していたことを物語るのであろう。

もう一つの相対的な例は普賢菩薩(E②)と猫又(A⑨)である。本双六では、猫又は着物を着て三味線を弾いている姿で登場する。それは遊女を暗示しているのであろう。遊女と普賢菩薩の相対を語る話は古来知られているものがあり、また、江戸時代に入って、遊女で普賢菩薩を表現する見立て絵も描かれるようになる。⁽⁸⁾一般庶民は、聖である菩薩と俗である遊女を相対的に見ていたのであろう。

「遊女」普賢菩薩は女性救済を暗示しているのではないかと考えられる。仏教説に見られる女性観(女性が生れながら罪業深く、穢れた存在であること)は十六世紀後期の「家」意識の高まりと相まって、さらに深まったように考えられる。十六世紀には「女性の地獄」(不産女地獄・両婦地獄・血の池地獄)が新しく成立したとされている。⁽⁹⁾このような思想は地獄絵や『熊野観心十界曼荼羅』などを通して一般庶民にまで流布してきた。これを背景として、

遊女と普賢菩薩、俗と聖を合わせた説話や見立て絵が成立した。遊女（女性）で普賢菩薩を表現することは遊女（女性）が菩薩になり得ることを意味する。菩薩になり得ることは女性が救済されるということである。

本双六には、普賢菩薩が二段目の真中に配置されている。この位置も以上に述べた女性救済を暗示していると考えられる。一段目の極楽浄土のすぐ下のこの位置は極楽浄土への通路となる。普賢菩薩の救済で、女性が極楽浄土へ行けるということである。本双六の下半分を見ると、様々な不幸な女性を見出すことができる。遊女を表す猫又（A⑨）、両婦地獄に出てくるような蛇身を持つ濡れ女（C⑧）、腰より下は血に染まっている——それは地の池地獄の暗示としても捉えることができる——産女（C⑨）などである。彼女たちを救済するような役割を担っているのは本双六の二段目に登場する普賢菩薩である。

相対性はそれぞれのものの役割にだけ見えるものではない。それぞれの住みかも相対的な場である。水界はその一例である。一方は水神である弁財天（「弁才天」、J①）や恵比寿（「夷」、B②）がいる。恵比寿は釣り竿と魚（鯛）を持つて島の上に立っているように描かれている。弁財天も島の上に座っていると描写されている。前者には漁業の神である恵比寿のイメージだけでなく、海の彼方からやっ

てくる「海を領したまふ」蛭子命や、同じく海の彼方から来る夷（「異国人」）のイメージも重なっており、恵比寿が水神となったと考えられる。後者の弁財天は多く、水際に祀られているものである。日本五弁天である竹生島・金華山・江ノ島・天河・宮島はいずれも水辺にある場所である。また、弁財天は蛇である宇賀神と同一視されており、蛇を使いとするものと認識される¹²⁾。この二つのことを合せて考えれば、水神としての弁財天の性格が見えてくるのである。

このように、本双六の上半分には水界を支配する二人の神がいる。他方は、本双六の下半分には水界から出ており、水と関係のある妖怪たちが並んでいる。それは海坊主（B⑦）・濡れ女（C⑧）・河童（G⑧）・産女（C⑨）などである。このような妖怪たちは完全に悪魔のような存在とは言えないが、一般的に悪の面から捉えられることが多い。この意味で、水界に関係のある妖怪たちは弁財天や恵比寿のような水神に相対的である。

住みかの相対性のもう一つの例としては、家を挙げることができる。一方は家の守護神である大黒天（C②）であり、他方は犬神（D⑥）・うわん（H⑦）・目一つ坊（H⑧）・しょうきら（J⑨）などの家に出没する妖怪たちである。後者の妖怪たちは家に出没していたずらや禍をなすものである。それに対して、前者の大黒天のような家の守護神が

いる。大黒天に関しては、寛政一〇（一七九八）年以降の成立と考えられる『七福神考』（国立国会図書館蔵）に次のように書いてある。¹⁴

或記^三云、大黒は佛なり、摩訶迦羅神といふ、北方をつかさどりたまふ、北方は子なり、故に子ノ日を以て是を祭る、（中略）世俗に大黒神の使者は鼠なりといふ（読点は筆者による）

家の中に出没する鼠は予知能力の持ち主とされており、鼠が家にたくさん現われると、何かの災害が起ると見なされている。¹⁵それを以上の「大黒神の使者は鼠なり」といふことと合せて考えると、災害直前に鼠が現われるのは単なる鼠そのものの意思によることではなく、災害を予告するために、よって家を守らせるために、大黒天に派遣されたからだという論理展開となる。家を守らせるために使いを派遣する大黒天は家の守護神にはかならないのである。

以上に見てきたように、本双六には仏界から地獄までの異界が配置されている。それは統一された「異界」空間として捉えることもできるが、実際は五・六段目あたりを境に二つに分かれている。その上半分と下半分を概して善と悪の世界として捉えられる。そのため、本双六の構成は二元的であり、両部分に配置されるものは相対的である。

三、異界に対する認識——善と悪の両義性——

本双六は以上のような構成をなしている。左上から右下へは善から悪へと異界の性格が変わっていく。仏界から様々な神や神に相当する者へ、それから妖怪へ、最後には悪の世界である地獄へ、というようである。

しかし、本双六の上半分は間違いなく善と捉えられるのに対して、下半分の全部が悪とするのは簡略化しすぎるように考えられる。一番下の十段目の地獄の諸種類が悪や苦しみの世界であることは間違いない。しかし、それ以上の段に配置されるものは多く、善と悪の両義性を持つものである。以下では、五・六段目の境界線を中心に善と悪の両義性について論じる。

境界論の中では、境界とは両義的な場とされている。このような定義は国家間の境界にも適合であり、またこの世とあの世の境界にも当てはまること¹⁶ができる。言い換えれば、境界は内と外を兼ね備える場である。このような境界に住んでおり、出没する者は両義的な性格を持つものである。

本双六においても、善たる異界と悪たる異界の境界線及びそこに表現されるものが両義的である。例えば、万歳（E^④）・厄払い（F^⑤）・古札納（G^⑤）・節季候（H^⑤）・大黒舞（I^⑤）はその典型的な例と言える。彼らは中世や

近世において盛んになった門付芸人であり、季節に応じて家々を訪れて幸福を祈るものであった。いわゆる来訪神のような性格を備えるものである。しかし、門付芸人（唱門師・声聞師）は時代と共に賤民化してきた¹⁸。このように、彼らは聖・福と賤・穢の両義的な性格を持つ者であり、善たる世界と悪たる世界との境界に相応しいものである。

また、厄病神（A⑤）や貧乏神（E⑤）も両義的な存在である。一般的に、厄病神も貧乏神も災厄などをもたらすものと思われる。しかし、小松和彦等が指摘しているように、近世においては両方とも福神に転化する傾向が見られる¹⁹。

次は六段目を見てみる。そこにはまず、山彦（B⑥）・天狗（C⑥）・酒天童子（F⑥）・山姥（G⑥）が並んでいる。いずれも山を住まいにしているものであり、山の神そのものである。東西を問わず、山は古くから異界あるいは異界への通路として認識されていたものである。山及びそこにいるものはこの世とあの世の境界に当たるのである。

さらに言えば、山彦・天狗・酒天童子・山姥などはカミなる異人としてだけではなく、自分の村・町の住人でないものなる異人としても捉えることができる。山は人里から離れたところであり、またその向こう側にある人里——自分の住んでいる村・町でない場所——をも意味するもの

である。そこで、山彦や天狗や山姥などの姿には二つの異人イメージが重なってくることになる。一方は他界の住人なる異人であり、他方は他村等の住人なる異人である。

また、正塚婆（奪衣婆、I⑥）や閻魔王（H⑥）も近世の人々にとっては、両義的な存在であった。一般的に、奪衣婆も閻魔王も地獄の入口にいる恐ろしいものだと思われるが、そうでありながら、善の面を備えるものでもある。奪衣婆は死だけではなく、生をも司る神として、室町時代に作成された『天狗の内裏』（信多純一氏蔵写本）に登場する。そこには奪衣婆が罪人に次のように言っている。

いかに罪人、よつく聞け、なんちら、しやばへ生るゝ時、一枚宛、かしてやりたる、糸なきんは、此しやうつかか役にて有、なせ、いまに、返さんぞ、今、かへして行と、仰ける²⁰

誕生の時にあげた「糸なきん」（＝胞衣着）を死の時にもらうという設定ではあるが、ここからは産婆としての奪衣婆の性格が垣間見えると考えられる。

また、近世では、奪衣婆が咳を止めてくれる神として民間信仰の対象となった²¹。

同様に、閻魔王も民間信仰の対象になっており、救済者としての閻魔王が登場するようになる²²。そして、支配者や

救済者である閻魔王のイメージには庶民でない支配者・権力者のイメージが重複するのではないかと考えられる。ここでは「王」という存在に対する庶民の認識が垣間見える。天皇などの現実の「王」に対する庶民の認識に関して別稿を用意したいが、ここではその結論だけを簡単に述べておく。つまり、現実の「王」である天皇も庶民の認識では、支配者であり、カミであり、救済者でもあったのである。

本双六に出てくる蛇神（E⑥）も両義性を備える存在である。古来、蛇は神そのもの、あるいは神の使いとして認識されていた。その意味では、本双六の蛇神は蛇を使いとする弁財天（J①）や摩睺羅伽（「まこら」、B⑤）と相対的である。他方、悪役としての蛇も知られている。古代の八岐大蛇はその一例であるが、近世の怪談においてもそのような例を見出すことができる。濡れ女（C⑧）のような蛇身の妖怪も江戸時代になってから知られるようになり、地獄絵などに描かれるような蛇身の女性が登場する両婦地獄も前述したように、十六世紀頃に成立したとされている。このように見ると、蛇神は両義的・境界的な存在でありながら、本双六では善と悪の両方の世界に相対するものである。

また、風神（A⑥）と雷神（J⑥）も実は、両義的な存

在である。一般的には風神雷神が浅草寺の雷門や輪王寺の大猷院靈廟の二天門のように、門番・守護神として寺院の門に安置されている。しかし、風神と雷神は守護神としての役割だけを担っているのではない。雷神に関して言えば、雷神の崇りのように古くから信じられていた。落雷という現象そのものは災害であり、またそれによる火災も災害であるため、いずれの時代においても人々がそれを恐れていたのである。それを考えると、雷神は必ずしも守護神や善たる神として認識されていたのではないとわかる。

風神も同様である。少なくとも江戸時代において、風神は厄病神の性格をも持つものであった。竹原春泉の『絵本百物語（桃山人夜話）』（天保十二（一八四一）年）には「風の神」が出てくる。その説明には「風にのりて所々をありき、人を見れば口より黄なるかぜを吹かくる、其かぜにあたればかならず疫傷寒をわづらふ事とぞ」とある。また、曲亭馬琴の『兎園小説』（文政八（一八二五）年）にも「若しこれ（風の神・風神——引用者の注に逢ふもの、風を引き煩ふのみならず、心の臓に入りて狂気のやうになり。身を亡し、家を破るとなり。」と似たようなことが書かれている。

以上のように、本双六の五・六段目には両義性を備えるものが並んでいるため、ここは善たる異界と悪たる異界の

境界だとわかる。本双六に出ていない人間界はおそらくその間にあるのではないかと考えられる。

おわりに

以上、異界双六を資料にして近世庶民の異界観について述べた。

本双六に表現されるものはいずれも異界のものである。その異界を善の世界と悪の世界に大別できるが、いずれも異人（言い換えれば異形のもの）の住む世界である。その意味では、岩城紀子氏の言う「神仏の世界」「現世」「異形の住む世界」のような分類は不適切である。その分類における「異形の住む世界」は「神仏の世界」をも含むからであり、また「現世」＝人間の住む世界は本双六に登場しないのである。その人間界が本双六の背後にあることは確かであるが、「この双六は三つの世界から構成されている」と言えるのかどうかは疑問である。

本双六はあくまでも異人の世界＝異界の描写である。一見では、その異界とは超人間的な存在であるカミの世界（他界）である。しかし、そのカミの世界でありながら、その表現にはその他の異界（漂泊者・支配者や権力者・異国人や外国人などの住む世界）も重複するのである。

それらの異人はみな、他者であり、他所からのものである

る。そのような異人と出会った当時の人々は、これがいずれの異界のものなのかがよくわからなかったのである。以上にも引用した曲亭馬琴の『兎園小説』には次のような興味深いことが書いてある。

寛保のころ、あやしきものを見たり。その形は人にして、年の頃廿あまりなるが髪のかきひやう、首の際よりまげの末まで壹尺五六寸、伊達もやうの下着袖口より五六寸計長く、羽織は地を引くばかりに五尺あまりの紐を附けたり。黒塗の下駄をはきたりしが、羽織の紐ときぐ足駄の歯にからみて、是をはづさんとすれば、髪のかきひの枝にかゝり、袴は下駄の歯のかくるゝばかりなりければ、行きなやみたる風情なり、脇指は二尺五六寸もあらんと覺ゆるに、刀のやうなるものをわきばさみたれども、立てざまに差したれば、柄は脇の下にかくれて見えず。椿やらん。刀やらん。おぼつかなし。手には八尺あまりの煙管を持ちたり。そのあやしさいはんかたなし。家にかへりてこれを図して、是は何といふものぞと人にとへども、さらにしる人なし。異国の人が。化物か。

不可思議な者・自分と明らかに異なる者と出会ったら、それは何者なのかかわからない。「異国の人」でもあり得るが、「化物」でもあり得る。つまり、不可思議な者は「異

界」の者である。異国人の住む世界も化物のいる世界も認識上では、一つの総合的な「異界」をなすのである。

本双六にもそのようなことが暗示されている。恵比寿を「夷」と表現することで、恵比寿は福神であるカミだけでなく、異国人でもあることがわかる。どこからともなくやってくる門付芸人は来訪神でありながら、異人なる漂泊者でもある。人里から離れた山奥に住んでいる天狗や山姥はカミであり、人里に現われることによつては旅人、あるいは山の向こう側に住む他村等の者としても認識されていた。また、閻魔王は他界（地獄）の支配者で、救済者の性格をも持つものであることから、現実の「王」ともある意味で重なつてくると考えられる。

このように見ると、認識上の「異界」とは複雑な構成をもつものとなる。一つの総合的な「異界」をなすそれぞれの異界は曖昧な境界線を持つものである。近世日本にやってきた黒船のイメージはその良い一例と言える。十六世紀に初めて日本に現われた黒船（南蛮船）は「危機をもたらしかねない得体の知れぬ存在」と認識されたのであるが、他方、黒船のもたらす富に対しても関心があつたに違いない。ここには黒船＝宝船のイメージが成り立つのである。⁽³⁰⁾逆に、十九世紀に日本へやってきた黒船は鬼の乗っている船と認識されていた。それはアメリカのペリーが幕末に鬼

のように描かれることから窺われる。つまり、異界である異国からやってくるものと、異界である他界からやってくるものは重複して認識されていたのである。

近世庶民の世界観に関する研究は、広い意味での「異人」論や「異界」論である。繰り返して言えば、「異人」や「異界」は異国人や外国人、あるいはカミ、及びそれらの住む世界だけではない。それは「はじめに」に述べた四つに大別できる総合的な「異人」「異界」である。本稿はそのような「異人」論や「異界」論における一考察である。

註

- (1) 例えば、『訪れる神々——神・鬼・モノ・異人——』（雄山閣出版、一九九七年）、小松和彦『異界と日本人』（角川書店、二〇〇三年）、『日本人の異界観』（せりか書房、二〇〇六年）などである。
- (2) 岩城紀子『妖怪浄土双六考』『日本妖怪学大全』小学館、二〇〇三年、六六頁
- (3) 前掲書、六八～六九頁。
- (4) 前掲書、九一頁。
- (5) 例えば、岩城紀子『浄土双六考』（『東京都江戸東京博物館研究報告』第一号、一九九五年）、『絵双六——遊びの中のあこがれ——』（東京都江戸東京博物館、一九九八年）など

である。いずれにも図版とごく簡単な説明しかない。

- (6) 国立国会図書館でこの双六が「十界双六」と名付けられたのはそのためであろう。

- (7) その他の浄土双六において、振り出しの部分に「南閻浮州」「南瞻部州」などのように、そこが我々の住んでいる世界Ⅱ人界であると明確になっている。

- (8) 例えば、『古事談』(十三世紀初め頃)の「性空見生身普賢事」、『十訓抄』(十三世紀半ば頃)の「性空上人見現身普賢菩薩事」、『撰集抄』(十三世紀半ば頃か)の「性空上人発心并遊女拜事」、十四世紀の謡曲『江口』などがある。

- (9) 例えば、北尾重政の「見立普賢菩薩図」や勝川春章の「見立江口の君図」などである。

- (10) 小栗栖健治『地獄絵の世界』河出書房新社、二〇一三年、六〇～六一頁。

- (11) 山本時亮編・山田直温校の『七福神考』、国立国会図書館蔵。寛政二〇(一七九八)年以降の成立か。

- (12) 同上の書。

- (13) 牛鬼(A⑩)も水辺に出没して濡れ女の間とされる(『日本怪異妖怪大事典』東京堂出版、二〇一三年、五五～五六頁)。本双六に出てくる土蜘蛛のような牛鬼の姿形はその一般的な捉え方に類似しているが、諸地獄に入る直前のその位置を考えると、水界に関係のあるものとしてではなく、獄卒(牛頭鬼)として見たほうがより適切だと考えられる。

- (14) 前掲書の『七福神考』。

- (15) 宮田登『江戸の小さな神々』青土社、一九八九年、二二一

～二二三頁。

- (16) 村井章介「中世日本列島の地域空間と国家」(『思想』第七三二号、一九八五年)、菊地勇夫「境界と民族」(『アジアのなかの日本史Ⅳ 地域と民族』東京大学出版会、一九九四年)、ブルース・バートン「境界からの日本史——想像の境界、現実の境界——」(『現代思想』第二四卷九号、一九九六年)、同著「境界」とは何か(『境界の日本史』山川出版社、一九九七年)、ロナルド・トビ「近世期の『日本図』と『日本』の境界」(『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二〇〇一年)などを参照。

- (17) 前掲書の『日本人の異界観』、『怪異の民俗学⑧ 境界』(河出書房新社、二〇〇一年)、赤坂憲雄の『境界の発生』(講談社、二〇一二年)などを参照。

- (18) 『唱門師』『日本国語大辞典』第七卷(小学館、二〇〇一年)。また、浅井了意の『浮世物語』(一六六五年刊か)の「茶の湯を戒めたる事」(第三卷第四話)には「古き茶入の古は、さこそ穢多唱聞師の賤しき奴原が手に持ち取り、扱ひぬらんと思ひやるも穢し」(『仮名草子集』日本古典文学大系九〇、岩波書店、一九六五年)と書かれている。そこからも、門付芸人・唱門師が賤視されていたとわかる。

- (19) 前掲書の『日本怪異妖怪大事典』。

- (20) 『室町時代物語大成』第九卷、角川書店、一九八一年、六二二頁。

- (21) 宮田登の前掲書、七四頁。

- (22) 松崎憲三「閻魔信仰——日本人の地獄・極楽観についての覚書——」『日本常民文化紀要』第十五輯、一九九〇年。

てくる福神の乗っている宝船に譬えてある。

(23) 摩睺羅伽はサンスクリット語ではマホーラガ (mahoraga) であり、「大蛇」を意味するものである。言い換えれば、巨大な蛇を神格化したものである。『三十三間堂の佛たち』(妙法院門跡、二〇〇二年、五五頁) を参照。

(24) 『江戸怪談集』(全三巻、岩波書店、二〇〇二年) を見れば、「蛇女をおかす事」「妬み深き女、死して男を取り殺す事 付女死して蛇となり男を巻く事」「土佐の国にて、女の執心蛇になりし事」「遠江の国にて、蛇、人の妻をかす事」などがある。

(25) 竹原春泉『桃山人夜話——絵本百物語——』角川書店、二〇〇八年。

(26) 『日本随筆大成』第二期第一巻、吉川弘文館、一九七三年、八十四頁。

(27) 岩城紀子の「妖怪浄土双六考」(前掲書)、九四頁。

(28) 前掲書の『日本随筆大成』、八三〜八四頁。

(29) 黒田日出男『黒船』のシンボリズム——日本の内外——『境界の中世 象徴の中世』東京大学出版会、一九八六年、一一三頁。

(30) 異国の船Ⅱ宝船のイメージは幕末に刊行された『新版萬國人物双六』(国立国会図書館蔵) にも見られる。その双六は宝船が描かれている振り出しの部分から様々な国々を巡るというように設定されているものである。最後に達するのは公家らしい人物の描かれている「上り」(おそらく日本であろう) である。ここには、様々な国を巡って海の彼方から日本へやってくる異国の船が、同じく海の彼方からやっ